

祐天寺の梵鐘

大正大学教授 玉山成元

朝もやをつき破って響く鐘の音は、心の底までしみわたり、ぼんやりとした気持ちをはきしめてくれる。昔から、鐘の音を聞くと、地獄にいるものは苦を離れ、すべての人々は悟りを開くといわれてきた。

祐天寺の梵鐘は、天英院（六代將軍徳川家宣の正室）が亡き夫の十七回忌追善として造立したものである。享保十三年（一七二八）十一月二十日、天英院は鐘の鑄造と鐘樓の建立費用として百五十両を寄進した。そして祐天寺は新しく建立された寺であるから、上野寛永寺の鐘（三尺三寸）より大きく造らないように。せっかく造るのに、いざこざがあるとまずいので、かならずこの範囲内で造るよう。また完成後は大切に扱い、以後破損することがあったら祐天寺で修理するように。今年に残る日も少ないので、工事は来春からとりかかるように。とつけ加えた。

翌十四年正月、祐天寺では早速工事にとりかかった。まず境内墓地わきに、二

間に八間の細工小屋と二間と三間の仮り小屋を作つて準備をすすめ、鐘樓は大工棟梁奥田甚平衛が作りはじめた。三月二十日、ほぼ一ヶ月の間に準備の完了した鑄鐘の方は、いよいよ実行にとりかかった。鑄造小屋の前に幅七尺四寸、深さ九尺の穴を掘り、二重枠にして鑄型を納め、その四方を土でよくつきかためた。そして竜頭の上に湯口をあげ、左右の湯釜の桶口三尺、高さ四尺余りを石でこしらえ、その次にたたら場を取りつけ、朝五時からふきたて、夕方四時には鐘はできた。江戸時代に造られた他寺の梵鐘が、すべて寺内で造られたのかどうかは明らかでないが、祐天寺の場合は、東大寺などと同様に、職人を呼んで自分の境内で鑄造した。今考えてみると、嘘のような話であるが、事実そうであった。この日天英院の名代として高山源右エ門が棧敷で鐘のできるまで検分し、小笠原喜之丞は足軽十六人をつれ、

この鑄造の完成までみまもった。

梵鐘を造るための材料費、すなわち銅とか錫とか真鍮などの地金の代金は、金八六両と銀四匁八分六厘で、その他に鑄物師の作料とか鐘樓の費用、あるいは石垣などの代金を入ると、総費用は金一九〇両三分二朱と銀四匁八分六厘であった。天英院から寄進された予算額の一五〇両ではとても完成はむりであった。それにしても驚くことは、奉行所や増上寺への往復文書ははんざつをきわめ、三六貫の費用がかかっている。こうした悪弊



祐天寺の梵鐘

大正大学教授 玉山成元

は今日でも同様である。

半日がかりで鑄こんだ鐘は、翌二十一日近所の人々が手伝って掘りおこし、さつそく計ったところ、四五〇貫あった。このほか湯余りの金が七〇貫あったといふから、地銀は五二〇貫以上溶かしたことになる。そして二十三日に試し撞きをした。一方ほとんど完成していた鐘楼は、日のよい四月四日を選んで落成式を行い、ここに梵鐘がとりつけられた。そして、十二日に、天英院から鐘供養のときに着用するようにと、導師の祐海上人に、白地金欄の七条袈裟と法衣・內衣まで寄進された。このみごとに袈裟や法衣は祐海上人にとって分不相応の品であったが、増上寺では特別の許可を与えている。こうして四月十四日から十六日の三日間にわたり、鐘供養が行われることになった。

供養式当日の会場の様子は実にすばらしい。鐘楼には葵御紋付き紫縮緬の幕が張られ、天英院名代をはじめ、貴賓の座席である棧敷には三方と同じ縮緬の幕、しかもその中をまた金屏風で囲い、本堂

から鐘楼までの一五か所には御紋付き提灯を立てるといふありさま。その他本堂・阿弥陀如来などすべて荘厳したといふから大変な費用であったろう。そして本堂の須弥壇上には文昭院（家宣）の尊牌が安置され、盛大な追善供養が行われた。

四月十四日の鐘の撞き初めで、天英院の名代として秀小路が勤めた。三日間行われた練供養には、約二〇〇〇人の僧侶が参加し、その他名主や百万遍講中、千部講中をはじめ多くの人々が参加したといふから、みごとにたつたであろう。小笠原喜之丞は足軽一五人をつれ、場内整理と交通整理を行った。またこの期間中に、正室天英院をはじめとして、側室右近方（法心院）・園氏（蓮浄院）・輝子（月光院）らは、それぞれ文昭院前・開山祐天上人前・阿弥陀如来前へ金銀・菓子・生花・紗綾・行器・蒸籠などの供物をし、名代を遣わしている。中でも十四日初日の天英院は四〇余人、竹姫は二〇人というありさまである。その他天英院

の御用人である酒井・松岡・遠山らも二疋つつ寄進し、諸屋敷をはじめ、寺院・武家・町方郷の参詣人はいちじるしかった。こうした施物を通して考えると、供養式そのものにかかった費用は莫大なものであったろうが、予算超過の梵鐘や鐘楼の赤字は十分補うことができたであろう。

徳川家宣時代の大奥は、念仏信仰に明けかけていた。將軍家宣はもちろんなこと、正室の天英院から女中にいたるまで祐天上人に傾倒し、生き仏として崇拜していた。梵鐘や鐘楼の寄進も、直接には家宣の十七回忌追善のために寄進したものであろう。しかし、間接的には、祐天寺の拡張に心を痛めていた祐海上人の行動を聞き、祐天上人の廟所がある境内を飾る気持ちで寄進したものであろう。